The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国哲学史研究ノート〔一〕
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1984, 1, p. 42-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国哲学史研究ノート〔一〕

加地伸行

研究者の学術的作業は、大きく二つに分けられる。一つは報告作成であり、いま一つは論文作成である。

報告とは、周知のように、主として実証的調査を意味する。具体的には、読解資料提示・統計など計量的調査・書誌・年譜・研究ノート（覚書）・資料紹介・文献提要・目録（書籍・論文など）・訓詁（出典調査など）・事項の一般的説明・辞典項目・研究史などの作成である。それに翻訳・書評も加えてよいであろう。

報告は、研究の基礎であり、研究者は自己の研究主題に即して、絶えず作成してゆく。そこに要求されるものは、何にも増して客観性である。或る特定事実の報告について、だれか別人がそれを追調査したとき、ほぼ同一結果を生み出しうることが必要である。もちろん、書評や研究史などの方面では、多少の揺れがあるにしても、それでもほぼ同一結果が出ることが要求される。いわゆる実証性であり、これが報告の特徴である。

比喩的に言えば、自然科学の研究における実験に相当する。実験では、他者の追試、追調査によってその報告内容が正しいと確認されて始めて実証的な公的存在として認知される。これと同じと言えるだろう。

一方、論文は、こうした報告を基礎にして（その場合、自分が作った報告であろうと、他者が作った報告であろうとかまわない。ただし、他者のそれの場合、引用であることを明記するのは当然のことである）、報告と報告との間、諸報告間を理論的に統合することを目的とする。どのように統合するのか、そのとき、研究者の論理が問題となる。すなわち或るテーマに関して諸報告の関係をどのように組み立てるのか、構想、構成の問題となる。このとき、報告においては必須のいわゆる実証性が、唯一絶対の論理となるわけでない。たとえば、或ることが

らについての報告の情報量が少ないとき、極端に言えば、二つの報告しかないとき、両者を仮に理化学的因果関係で結びつけたところで、それは粗大な抽象的な因果関係に終るだけであって、いくらその両報告自身が実証的なものであっても、それを前後に並べたところで実証的であることにはならない。逆に、情報量が厖大なとき、そのすべてを因果関係で結びつけたところで、そのすべてを通しての全体像が構成されるわけでもない。

論文構成の場合、当然、報告に対する選択（これはつごうの悪いものを選ばないという意味ではない）という価値判断が生ずる。そこで始めて組み立て、構成し、統合が可能となる。

ただし、もしその際に使った報告と違った報告が別にあったとき、なぜ此を取り彼を捨てたのかという論証をする必要がある。つごうの悪い報告は隠すということがあってはならない。

さて、論文構成の際、報告に対する価値判断の基準とは何か、それらをどのように組み立てるのか、構成してゆくのかということになるが、これこそ、論者の立場によって異なる。論者の思想的立場、性向、人生観といった全人格的問題がそこには関り、その価値判断による一定の論理に従って組み立てを行なうこと、その行為の中で論者の方法が建設されてゆくことになる。このようにして方法を立ててゆくことが学問をすることであることは周知のとおりである。

このように、報告と論文とは、その任務を異にするのであって、そこに価値的上下はない。報告と論文との価値を比べるのは、比喩的に言えば、たとえば洋服と和服との両者の上下を論ずるようなもので、あまり意味がない。洋服の領域に上下があり、和服の領域に上下があるようにそのように、良い報告とできの悪い報告とがある、あるいは、すぐれた論文とつまらぬ論文とがある、というだけのことである。

研究者たる者の必要条件は、まず良い報告が書けることである。良い報告が書けないで、研究者となれることは、絶対にありえない。

そういう必要条件を備えた上に立って、研究者の十分条件はと言えば、論文が書けることである。

もちろん、良い報告は書けるが良い論文を書けないという研究者がいるが、良い論文は書けるが良い報告は書けないということはないと考える。

一方、報告は数多く書くが、論文は数少ないとか、論文の数は多いが、報告は少ないという現象があるが、これは量の問題であって、前段の質の問題とは別である。

× × ×

中国哲学史関係において、毎年、数多くの論考が発表されている。しかし、私の見るところ。その大半は報告であって、論文ではない。もちろん、それが悪いというわけではない。報告が数多くでるということは、研究の着実な進展を示すものであって、学界の慶事である。しかし、残念なことがある。第一は、報告と論文との区別がつかない人が多い点である。第二には、

報告と銘打ってなんら恥ずべきでないのに、報告よりも論文の方が上であると錯覚を起して、報告を論文と称する人がいる点である。

一方、発表場所を見てみると、全国性の雑誌は、論文登載か中心であり、地方性の雑誌、大学研究室発行の雑誌、紀要等の場合は、論文・報告登載が相半ばしている。

論文の場合、発表場所について問題はない。枚数制限内で論者の思考過程を論述することが可能であり、雑誌としてもふつう論文を主体としているからである。

しかし、報告の場合、相当の制約を受ける。たとえば、四百字詰五十枚分の資料紹介の登載を許す雑誌があるとは、寡聞にして知らない。あるいはたとえば、研究史だけを登載している雑誌の名もまた聞かない。

そのため、おそらく経験を積んだ研究者の手もとには、数多くのすぐれた報告が眠ったままではないかと考える。また一方、経験の浅い研究者が、研究者として成長してゆく過程での良い報告を発表する機会が少ないのではないかと考える。

そこで私は、論文を主体としてではなくて、報告登載を主体とする雑誌の刊行を企画したのである。おそらく、中国哲学史の学界では始めての編輯方針であろうかと思う。

若い研究者の場合、論文は三年に一篇でもよいが、報告は毎年一篇は書くべきであると思う。それは絶えず研究を行っていることの証左だからである。報告を書いてゆく内に、しだいに論文の構想が生れてくるものである。そういう着実な歩みの結果として生れた論文は、全国性の雑誌、すなわち個人的縁故のない審査員という厳しいレフェリーの批判を受けることのできる全国性の雑誌にできるだけ投稿すべきと思う。他者の目というハードルを越えてこそ、研究者として大きく成長してゆくと考える。全国性の雑誌に一度でも登載されたとき、研究者として認められたライセンスを得たと言えよう。